

自閉症児における機能的な概念形成についての指導

Training for functional stimulus-class discrimination in a child with autism

○浅原 薫・奥田健次

Kaori ASAHARA and Kenji OKUDA

(愛知県公立中学校スクールカウンセラー・桜花学園大学人文学部)

School Counselor of Aichi Prefecture・Ohkagakuen University

【目的】 本研究では、1名の自閉症児に対し、機能的な概念形成について指導を行い、その指導効果について検討を行った。

【方法】 1. 対象児 医療機関において自閉症と診断された男児1名(指導開始時、生活年齢5歳5か月、田中ビネー知能検査IQ68)を対象とした。本児は週1回大学相談室にて認知・言語面、コミュニケーション面での療育をうけていた。

2. マテリアル 絵カードは精研式CLAC、実物の「くだもの」は模型を、「服」は人形の洋服を用いた。「おかし」は、F条件の実物の分類のみ模型を用い、その他の条件では実物を用いた。

3. 手続き

1) A条件(絵カードの分類課題) 「おかし」と「くだもの」の絵カードを8枚ずつ、計16枚をランダムに提示し、別々の箱に分類させた。誤反応をした場合は、正答の箱を指さしプロンプトし、再試行を行った。

2) B条件(機能語→絵カード) 「体(もしくは服)」「くだもの」「おかし」の絵カードを3肢選択で実施した。「くだもの(おかし)」とトレーナーが教示し適切な絵カードを選択することを求めた。6試行1ブロック行った。誤反応の場合は再試行した。

3) C条件(機能語→実物) 「体(もしくは服)」「くだもの」「おかし」の実物の3肢選択で実施した。B条件と同様の手続きで行った。

4) D条件(実物→絵カード) 「体(もしくは服)」「くだもの」「おかし」の絵カード3肢で実施した。実物を提示し、適切な絵カードを選択することを求めた。6試行1ブロック行った。誤反応の場合は再試行した。

5) E条件(絵カード→実物) 「体(もしくは服)」「くだもの」「おかし」の実物3肢で実施した。D条件と同様の手続きで行った。

6) エコー付トレーニング 「くだもの」「おかし」とエコーさせてから絵カードを渡し分類させた。

7) F条件(実物の分類課題) 「おかし」と「くだもの」の実物模型を8種類ずつ、計16個を用い、A条件と同様の手続きで行った。

【結果】 Fig.1に機能的な概念形成指導における正反応率を示した。上段は分類課題(A条件、F条件)、

下段は機能的等価関係の成立指導の正反応率である。機能的等価関係については、Fig.2に示した。機能的等価関係の指導(B~E条件)で100%の正反応率を示しても、A条件での正反応率は上昇しなかった。エコー付トレーニングを実施したところ、正反応率は上昇し、F条件(実物の分類)にも般化がみられた。機能的等価関係の成立については、E条件(絵カード→実物)において指導の実施後、B条件(機能語→絵カード)の正反応率が上昇した。

【考察】 本研究では、自閉症児に対して機能的な概念形成の指導を実施した。その結果、「食べ物」の下位クラスである「おかし」と「くだもの」の概念を形成することが可能となった。A条件、F条件のような分類課題の手続きを独立変数とするのではなく、成立していない関係を探し指導を行った。この指導を実施することで、後のエコー付トレーニングに効果があったと考えられる。

認知・言語領域の療育を行う際、できない課題について工夫するのではなく、前段階に戻り、どこでつまづいているかを丁寧にアセスメントしていく必要がある。

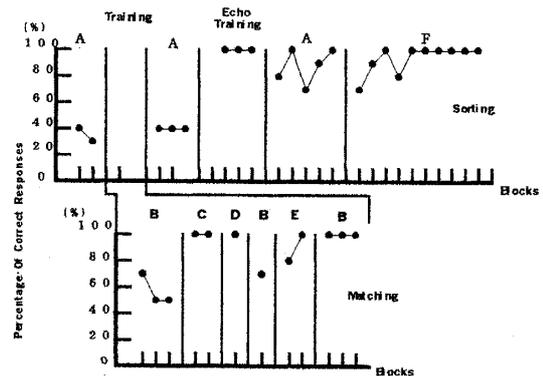


Fig.1 機能的な概念形成指導における正反応率

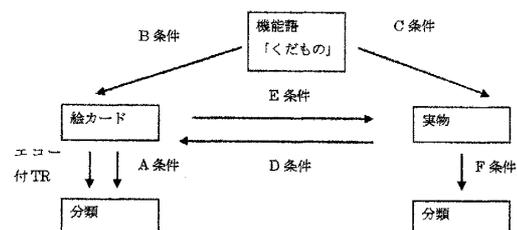


Fig.2 「おかし」「くだもの」の機能的等価関係